伝えたいことを効果的に表現する子ども

～地域のガイドブック作りを通して～

第６学年の実践

はじめに

６年生４名の実践である。４名は、学級や学校のリーダーとして何事にもやる気をもって取り組んでいる。

４月から、「市振の良さをたくさん見付けたい。」「ふるさと市振をたくさんの人に知ってもらいたい。」という願いをもち、総合的な学習や行事等に取り組んできた。

１ 単元名　「オリジナル市振ガイドブックを作ろう」（光村６年『ガイドブックを作ろう』）

２ 単元の目標

読む人にとって必要な要素と効果的な書き方を考えて、市振ガイドブックを作る。

３ 単元について

本単元は、ガイドブック作りという活動を設定し、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること、また分かりやすい構成を考えたりすることを学習内容としている。

今回は総合的な学習の時間に行ってきた地域学習と関連させ、ガイドブックを作ることにした。その際、市振地域の良さを伝えるという大きな目的は全員共通とし、テーマは個別に設定し、一人ひとりのオリジナルガイドブックを作ることにした。市振の良さを地域外の人や地域の人にＰＲするためには、読み手が関心をもって読み、実際に役に立つガイドブックにする工夫が必要である。使う人の身になって構成や内容を考え、効果的に表現する力を本単元で育みたいと考えた。

４ 効果的に表現するための手立て

①　各時間にやることを明確にする。

単元の指導計画表を教室に掲示し、各時間に学習する内容が子どもたちに分かるようにする。それによって、「ガイドブック完成」を目指し、見通しをもって活動することができると考えた。

【指導計画の提示】

1	よいガイドブックについて調べる。	6	文章を書く。
2	ガイドブックのテーマを決める。	7	文章を書く。
3	必要な情報を集める。	8	文章を書く。
4	情報を整理し、ガイドブックの項目を決める。	9	チェックシートでチェックし合い、校正する。
5	全体の構成を考え、レイアウトを決める。	１０	ガイドブックを完成させる！

②　読み手を意識して書く。

市振の良さを誰に伝えるためのガイドブックなのかを明確にする。読み手を具体的に想定することによって、必要な要素や効果的な書き方を頭の中に思い描くことができると考えた。

③　チェックシートによる相互評価

完成に向けて、表記の誤りを正したり、より分かりやすい表現にしたりするために校正を行う。その際、互いの表現の特徴やよさに触れることを通して、表現や表記への関心を高めるように相互評価を取り入れる。

校正の手順

ァ　教科書の例を参考にしてチェック項目を考え、チェックシートを作る。

ィ　チェックシートに従って互いの下書き原稿をチェックする。

ゥ　チェックシートの結果を見ながら、校正をする。

５ 指導の実際

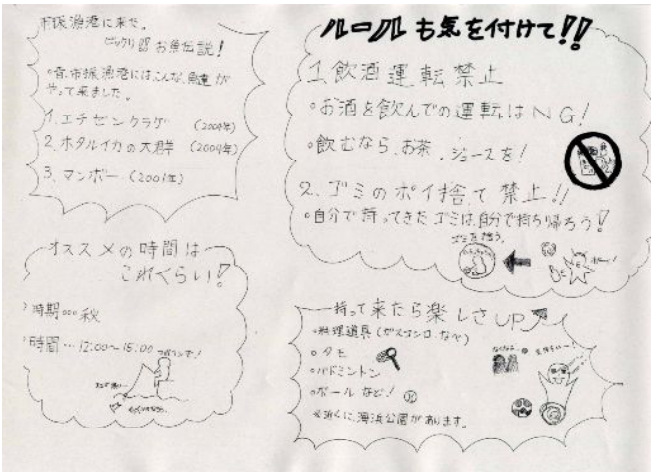
各時間にやることを明確にする。

指導計画を掲示し、ガイドブック完成まで何をすればよいかを確かめられるようにした。また、各時間の始めにその時間の学習内容を確認した。

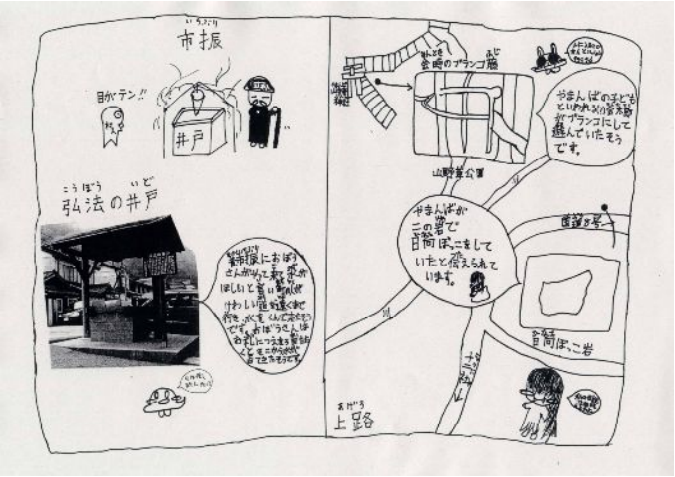
読み手を意識して書く。

Ａ児は、「市振漁港での釣り」をテーマにガイドブックを作った。読む人が興味をもってくれるように見開きの最初に、「市振漁港に来たビックリお魚伝説」という見出しの記事を載せた。そこでは、自分が小学校に入学してから漁港に現れた珍しい生き物ベスト３（越前クラゲ、ホタルイカ、マンボー）を紹介していた。

また、Ｂ児は、下学年児童に「市振の伝説」を知らせるガイドブックを作った。読み手が関心をもってくれるようにと、地域の伝説に登場する山姥をキャラクターにして解説をしたり、文章には全てふりがなを振ったりするなど、自分なりに表現の工夫をしていた。



【Ａ児のガイドブック】



【Ｂ児のガイドブック】

チェックシートによる相互評価

２人組になって手書きのチェックシートを作り、１００点満点として採点をした。Ｂ児は、「段落に分けるなど、文章が読みやすくなるように工夫する」という項目が「△」で９０点だった。そこで、友達からのアドバイスを参考に校正した結果、段落ごとに改行した分かりやすい文章を書き上げた。

６ 成果と課題

○誰に向けて作るパンフレットなのかを意識しながら活動を進めることができた。作りながら項目を付け足したり、表記の仕方に気を配ったりする姿が見られた。

○友達のパンフレットを採点したり採点してもらったりする相互評価の活動を通して、完成前に自分のパンフレットを客観的に見直し、校正することができた。

●テーマの決定や項目決めなどを短期間で行ったため、十分に資料を集めたり調査活動をしたりすることができなかった。そのため、一つの記事を書くために一つの資料だけを見て書いたり、もともと知っていることだけを書いたりするパターンになってしまった。地域の人や自然と十分に関わりながら、書きたいという思いをじっくり育まなくてはいけなかったと感じた。今後は、一人ひとりの思いに裏打ちされた表現活動を行えるようにしたい。